2022 年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	山口　瑞穂
研究テーマ	日本国内の宗教運動における終末論的救済観の比較研究
研究概要	日本国内の終末論的な救済観を掲げる宗教運動を比較検討するための分析視座を、文献調査によって検討する。

１.研究活動の概要と研究成果	今年度のおもな研究としては、日本発祥の新宗教における終末論（千年王国論）の総論的な先行研究をふまえ、戦前期における灯台社（現在のエホバの証人）の事例を中心に比較検討をおこなった。宗教者による戦時下抵抗に焦点を絞ると、灯台社に対する社会的な評価が戦前／戦後では正反対となること、戦後、日本発祥の新宗教が終末思想的な要素を後退させた中、エホバの証人の救済観は現在も急進性を維持していること、同教団の終末論には反社会的な要素が少ない一方、信者たちを布教活動に動員する際の宗教的なレトリックとしての側面があることを指摘した。宗教運動における救済観や世俗的な社会との向き合い方にくわえ、社会的な評価との相互性にも注目が必要である。戦後のエホバの証人については、とりわけ近年、「宗教 2 世」をめぐる問題が顕在化し始めている。そのため、この教団に関する報道の前史として、2021 年までの紙媒体の報道と社会的な評価の諸相も明らかにした。
２.学術論文・学会発表等	〔論文等〕 単「戦後日本におけるエホバの証人に関する新聞・雑誌報道の分析」『佛教大学総合研究所紀要』第 30 号、pp.37～52、佛教大学総合研究所（2023 年 3 月刊行、査読有） 単「終末論的な救済観と戦時下の宗教運動――明石順三の事例を中心に」『宗教研究』96 巻別冊、pp.213～214、日本宗教学会（2023 年 3 月刊行、査読無） 〔発表〕 単「終末論的な救済観と戦時下の宗教運動――明石順三の事例を中心に」第 81 回日本宗教学会学術大会（2022 年 9 月 11 日、愛知学院大学（オンライン開催）） 単「リプライ」第 5 回「メディア宗教」公開研究会『近現代日本とエホバの証人』書評会（2022 年 10 月 1 日、オンライン開催）
３.今後の課題	改めて気づいたのは、何をもってそれぞれの宗教運動のありようを終末論・終末思想としてきたのか、先行研究の分類や定義自体が多様な点である。この点について、さらに踏み込んだ検討をすることが今後の課題である。